

「イエスの手が触れるとき」

マタイによる福音書 8:1-4

2025年9月7日
野村 友美 師

<痛みを抱えて生きるときに>

暑かった8月が終わって、いよいよ9月に入りました。とは言え、9月になってもあいかわらず暑いですね。皆さんは、お元気ですか？

今年は特に暑さが厳しいですし、しかもこれだけ長く続いたら、みんな多かれ少なかれ体に堪えているんじゃないでしょうか。暑さのせいだけじゃなくて、私たちの体は歳を重ねるにつれて、あちこち弱ったり傷んだりしてくるものです。

「こればかりは仕方がないから」と、それぞれに弱いところをいたわりながら、私たちは日々を生きています。

それでも、痛みやしんどさをずっと抱えていると、いつの間にか気持ちも一緒に弱ってしんどくなるときがあるでしょう。思うように動けないことが情けなくて、悲しくて、「こんな私では何もできない、役に立たない、価値がない」と、自分で自分にレッテルを貼ってしまう。そういう心の苦しさは、体の苦しさと同じぐらい、いえ、もしかしたらもっと辛いものかもしれません。

今日の聖書の物語に登場する病人も、まさにこの心の苦しさを抱えていました。

重い皮膚病に蝕まれた体の辛さと、それ以上に苦しい心の辛さから解放されたい。「価値がない」と自分自身を責め立てる思いから、どうか私を救い出してほしい。そんな必死の願いを抱えて、この病人はイエス様の前に走り寄って、ひれ伏して、

助けを求めて声を上げたんです。

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と。

<主よ、御心ならば>

重い皮膚病と呼ばれているこの人の病気が、具体的に何の病気だったのか、はっきりとはわかっていません。

聖書のあちこちに登場するこの「重い皮膚病」は、多くの場合、人にうつる伝染性の皮膚病を指しています。それは人の体の病気だけではなくて、家の壁や衣服に発生する特殊なカビも、同じ名前と呼ばれていたそうです。

重い皮膚病と呼ばれるこの病気は、かかったその人の見た目を醜くして、時には命も奪う病として恐れられていました。

それだけじゃありません。古代イスラエルでは、「重い皮膚病」は他の病気とは明らかに区別されていました。聖書の中でも、他の病気が治る時には「癒やされる」と言われるのに、この病気だけは「癒やされる」じゃなくて「清められる」と表現しています。

重い皮膚病にかかった人は「清くない」、つまり汚れていると判断されたんです。

当時のイスラエル社会において、「汚れている」と判断されることは、「神様と関わりを持つ資格がない」と宣告されるのと同じことでした。

神様の民として、ふさわしくない。

神様を礼拝するのに、ふさわしくない。

神様に愛されて、喜ばれるのにふさわしくない。

そういう「清くない」もの、汚れたものとし

て、重い皮膚病にかかった人たちは扱われていたんです。律法でも、重い皮膚病の人は隔離するようにと決められていました。

旧約聖書のレビ記を見ると、この決まりが詳しく書かれています。重い皮膚病にかかった疑いがある人は、まず神様に仕える祭司のところに連れて行かれます。そして祭司が体を調べて、重い皮膚病だと判断すると、その人は「あなたは汚れている」と言い渡されました。

汚れている人やものに触ると、触った人もまた「汚れた」と見なされます。ですから重い皮膚病にかかった人は、家族や周りの人たちから離れて、町の外に 住まなくては いけませんでした。

もちろん、神殿や会堂での礼拝に参加することも禁じられます。しかも、重い皮膚病にかかっていることが一目でわかる格好をして、「わたしは汚れた者です」と言いながら歩くように、義務付けられていたんです。

ひどい話だと思いますが、コロナ禍を経験した私たちは、この重い皮膚病にかかった人の状況も、周りの人々の反応も、感覚としてわかるのではないのでしょうか。

目に見えないウイルスが、いつどうやって伝染るかわからないのと同じように。

重い皮膚病も、その病気を引き起こすとされた汚れも、いつどうやって伝染するかは誰にもわかりませんでした。だから周りの人たちは、とにかく病人から距離をとって自分を守るしかなかったんです。

それがわかっていても、他の人たちから避けられるのは、どんなに悲しくて辛いことだったでしょう。その上、重い皮膚病の患者は「汚れている」、神様のものとしてふさわしくない、と見なさ

れました。

周りの人たちだけじゃなくて、神様さえも私と関わってくださらない。そう感じる孤独を、この病気にかかった人は味わうことになったんです。

人からも神様からも引き離されて、見捨てられる孤独。それはきっと体の辛さ以上に、病人たちを苦しめたでしょう。

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。」

この病人の言葉は、悲痛な叫びにも聞こえます。

目の前のイエス様が、重い皮膚病を癒やす力を持っておられるということ自体は、この人は少しも疑ってはいません。疑っていないからこそ、彼は「他の人に近づいてはいけない」という律法に背いて、手を伸ばせば触れる距離までイエス様に近づいて、助けを求めたのでしょう。

この時、イエス様は長い教えを語り終わって、弟子たちや群衆と一緒に山を降りてこられたところでした。そこにいた群衆は元々、いろんな病気に苦しんでいた、悪霊に取り憑けられたりして、イエス様に癒してもらおうと集まってきた人たちです。

ガリラヤ地方だけじゃなくて、エルサレムや他の遠くの地域からもやって来ていた、とマタイの福音書は先に紹介しています。

それだけイエス様の噂が広がっていた、ということでしょうね。きっとこの重い皮膚病の人のところにも、「ナザレから来たイエスには、どんな病気でも癒す力がある」という噂が届いていたんだと思います。

だから彼が疑っていたのは、イエス様が病気を癒せるかどうかじゃなくて、「こんな私のことも、癒そうと思ってくださるかどうか」でした。

このイエスという御方も、他の人たちと同じように、私を見捨てるんじゃないか。

「お前はもう神様の民にふさわしくない」と言われるんじゃないか。清くない私になんか、関わりたくもないんじゃないか。そんな怖さに震えながら、それでもこの病人は必死でイエス様を頼って、なりふりかまわず近寄って、ひれ伏しました。

もしイエス様が、私を癒そうと思ってくださったら、私はまた神様と繋がっていられる。

神様の民として生きられる、神様に喜ばれて生きる人生に、戻ることができる。

「どうか戻してほしい」という切実な願いと、「でも、どうせ私なんか」という絶望に引き裂かれるような思いが、彼の「主よ、御心ならば」という言葉に込められているんです。

<イエスの手が触れるとき>

重い皮膚病の人が近寄って来たとき、きっと他の人たちはビクビクして、慌ててとび退いて距離をとったでしょう。そうするのが当たり前で、正しいと思われていたことだったんです。

でもイエス様は違いました。

汚れている、と見なされる病気のこの人から離れるどころか、手を差し伸べてしっかりと触って、こう言われたんです。

「よろしい、清くなれ。」

このイエス様の応答を直訳すると、こういう言葉になります。

「わたしは望む、清くなれ。」

新改訳聖書の訳が、私にとってはとても印象深

かったです。

「わたしの心だ、きよくなれ。」

これがわたしの心だ、わたしはこう望んでいる。

そう言って、イエス様は彼の病気をお癒しになりました。

わたしは、あなたと関わることを拒んだりはしない。神様の民として、神様の愛の中で生きる人生に、もう一度あなたを送り出したい。

これがわたしの心、わたしの望みだ。

誰も触ろうとしなかったその人の体にしっかりと触れて、イエス様は心からの願いを込めて、宣言なさったんです。これがわたしの心、わたしの望みだ、さあ清くなれ！と。

そうイエス様が言われると、たちまち重い皮膚病は清くなった、と福音書は伝えていきます。

ふさわしくないものから、ふさわしいものへ。神様と引き離されたものから、神様と一緒に生きるものへ。

この変化は、重い皮膚病を癒やされたから、起きたのでしょうか？

それは少し違う、と私は思います。

だって、重い皮膚病が癒やされるその前に、イエス様の手はこの病人にしっかりと触れていたんですから。

律法は「汚れたものに触れてはいけない、触れた人も汚れる」と定めています。重い皮膚病だったこの人が本当に、神様の民にふさわしくなかったのなら。重い皮膚病にかかっている限り、この人は神様に愛されて喜ばれる存在にはなれなかったのだとしたら。

イエス様はまず彼の病気を癒やして、それ

からこの人に触れてもよかったでしょう。

でもイエス様はまず先に、この重い皮膚病を患った人の体にしっかりと触れて、それから「わたしは望む、清くなれ」と言われました。

重い皮膚病が癒やされる前から、イエス様はこの人を「汚れたもの」として扱ってはおられないんです。

神様と繋がっていたい。

神様の民として生きたい。

神様の愛の中で生きていきたい。

そう必死に願って、拒絶される怖さに震えながら、それでもイエス様に近寄って、ひれ伏して助けを求めたこの人を、イエス様はもう「清い」存在として扱っておられます。

ためらうことなく手を伸ばして、しっかりと触れて、「あなたは清いんだ」と先にイエス様はこの人に、行動で示しておられるんです。

「わたしは望む、清くなれ」というイエス様の宣言は、この病人自身の心の向きを変えさせるための言葉です。

実際に重い皮膚病が癒やされて、この人は誰から見ても「清く」なりました。

エルサレム神殿の祭司だって、もうこの人を「清くない」とは言えないでしょう。

病気が癒やされたことで、彼が自信をもって堂々と、神様の民として生きる道が整いました。

ですから、目に見える体の癒しはこの時、この病人にとって確かに必要だったでしょう。それでもイエス様にとっては、まだ重い皮膚病を負っている時からすでに、この人は「清い」存在だったんです。

神様と生きる人生を必死で願って、イエス様に助けを求めたときに。イエス様の手が触れたとき

に。

この人はもう「清い」もの、神様の民にふさわしい存在だと認められていたんです。

痛みやしんどさや不自由を抱えて、体も心も弱ってしまうときが、私たちにもあるでしょう。思うように動けなくて、情けなくて、悲しくて、「私は役に立たない、価値がない」と自分で自分を「清くない」ものみたいに扱ってしまう。

そういうときが、きっと誰の人生にもあると思います。それでも神様と生きることを願って、イエス様に近寄ってひれ伏すなら。

「主よ、御心ならば」と助けを求めるなら。

イエス様はいつでも手を差し伸べて、私たちに触れておられます。

これがわたしの心、わたしの願いだ、さあ清くなれ！

そう言って、神様の民として生きる道へと、イエス様が送り出してくださいます。

痛みもしんどさも不自由さも、そのままかもしれません。それでも、イエス様の手はしっかりと一人一人に触っておられるんです。

その手の温かさ、力強さに信頼して、私たちは今日も神様と生きる人生に送り出されていきましょう。

この体の命を生き終える日まで、それぞれの歩みで神様に従い続けていけますように。

その先の命も約束してくださっている主、イエス・キリストに頼って、天の国を目指す旅路を一步ずつ、ご一緒に進んでまいりましょう。

お祈りいたします。